



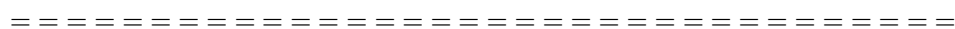
地域日本語支援ニュース こだま 第 356 号

2019.3.14



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。



■ともに生きる■

2011 年 3 月 11 日、マグニチュード 9.0 の地震が三陸沖で発生し、東北地方は甚大な被害を受けました。福島県いわき市でも震度 6 弱が観測され、度重なる余震に襲われました。そして、原子力発電所の事故は人的・建物被害のみならず、風評被害をも引き起こすこととなりました。あれから 8 年。復興への歩みを着実に進めてきたいわきで、新たな生活を始める外国人住民が増えてきています。IIA の須向さんに、いわき市の今をご報告いただきます。

.....

いわきから元気を発信します

公益財団法人いわき市国際交流協会 (IIA)
主査 須向 敏子

◆増えてきた外国籍住民

東日本大震災から 8 年が過ぎました。当時は多くの外国人住民が帰国しました。その後“いわきは第二の故郷”だからと、多くの方が戻ってきました。そして、震災を経験していない新たな住民も増えました。“都会のように騒がしくなくて、やさしい人がいっぱいいるところが好き”と言ってくれるととてもうれしくなります。今、外国籍住民の数は約 2500 人で、市人口の 0.7%を占めています。結婚や留学に加え、ベトナムからの技能実習生が急増しています。

いわきの子どもたちは 外国語指導助手(ALT)やこの町で暮らす外国人から外国語や外国の文化を学ぶようになりました。身近なところで働く外国人が増えてきたことによって、彼らとのかかわりがあるのは特定の人だけという考えから変わってきていると感じます。

◆広がる日本語学習支援の輪

そうした地域が変化する中で、日本語の学習を支援しようというボランティアの輪が広がっています。IIA は、日本語支援ボランティアの皆様の協力を得て、いわき市独自のテキストを作成し、学習者が主にマンツーマンで日本語を学ぶことができる場の提供を行っています。

今回は ALT（外国語指導助手）のレットさんと、ボランティアの石川さんにこれまでの支援や活動を振り返っていただきました。いわきにおける人と人とのつながりの様子をいわきから発信します。

【日本とアメリカの架け橋に！】

いわき市外国語指導助手
レット リース

2017 年の 7 月、私はアメリカからいわき市に ALT として来ました。最初、私の日本語はあまり上手ではありませんでした。日本語でレストランの注文をしたり、お店の予約をしたり、学校で先生方と打ち合わせをしたりすることがとても難しく、その時は本当に困ってしまいました。そこで私は日本語をもっと勉強する必要があることに気づき、同じいわき市の先輩 ALT に相談しました。先輩が IIA のことを教えてくれました。早速、私は先輩の助言に従って IIA に入会し、今は IIA が探してくれたボランティアの先生と、毎週日本語の勉強をしています。

去年の 12 月に日本語能力試験を受けて、私は N3（5 段階のうちの真ん中のレベル）に合格しました。これはボランティアの先生と IIA の協力のおかげだと思っています。もちろん、わからない日本語はまだいっぱいありますが、最初のころと比べると、日本語を使ってできることが増えたので、今はとても楽しいです。IIA のイベントに参加したり、地方や観光地を友人と旅行したり、日本の家に招かれて伝統的な行事を体験させてもらったり「話せる」ことで「理

解する」ことが広がりました。今年の 6 月に N2（5 段階のうちの上から 2 番目のレベル）の試験があるので、次は その試験に合格するために、もっと日本語を勉強したいと思っています。そして、日本での文化の違いなどいろいろな経験を、母国に帰った後も役立てていきたいと思っています。

【外国にルーツをもつ子どもたちへの日本語支援】

日本語支援ボランティア

石川 知子

4 年前に始めた日本語支援ボランティア、最初の依頼がパキスタン出身の中学 1 年生でした。日本語支援に関しての知識も殆どなく、子どもに勉強を教えればいいのかしら程度にしか考えていませんでした。しかし、支援していくにつれ、大人と違って自分の意思に関係なく日本で暮らすようになった子どもたちの厳しい現実をつきつけられました。今まで 7 人の子どもを学校で支援しましたが、そのうち 4 人が数ヶ月のうちに転出してしまったり、母国に帰ったりしてしまいました。

いわき市は外国人が増え続けていますが、子どもはまだ少なく、市全体の問題として取り上げられていないのが実情で、支援内容や期間についてガイドラインがありません。そこで有志で、昨年 12 月に外国にルーツをもつ子どもの日本語支援の会「おひさま」を発足しました。現在 9 名で、子ども支援ボランティアのための支援セットを作成中です。今年の 2 月から新たな支援の依頼が入り、中学入学までの限られた期間、学校の内外で 3 人のボランティアが支援しています。支援者同士や学校と連携を密にしながらの支援ができて心強い限りです。いわきの暮らしが楽しいと思ってくれることを願いながら、これからも支援していきたいと思っています。
